脱施設化ガイドライン案への世界のコメント（2022年6月）　No.97

**リチャード（チェコ）**

**緊急時を含む脱施設化ガイドライン草案に関する意見提出**

Mr. Richard

Written Submission to the UN Committee on the Rights of Persons with Disabilities

on the Draft Guidelines on Deinstitutionalization, including in emergencies

ヴァリディティ財団RYTMUS（精神障害者擁護センター）の協力による

*リチャードは14年間施設で暮らした。施設生活は決して幸せなものではなかった[[1]](#footnote-1)。*

総じて私は、ガイドライン全体がとても曖昧だと感じた。*(ソーシャルワーカーと一緒に繰り返し読み、具体的なケースについて話し合うことで、初めて理解できるようになった）。*

施設を閉鎖するということは、実際にはどういうことか。私が主に心配しているのは、ボフニツェ（Bohnice　プラハ北部の地区）の精神科病院に入ることになるのではということである。施設を閉鎖する前に、そこにいる人たちがより悪い状態にならないように、何らかのより良いものが提供されなければならない。

多くの人は施設にいることを幸せに思っている。そうでなければ一人で生きていかなければならないから。したがって、施設にいる人たちが退去するときや退去した後に、薬の服用や家の手入れなどに支援を受けられることがとても重要だというのは事実である。

また、施設の外に出るための支援を受けるのに必要なお金を持っていることも非常に重要である。なぜなら、例えば、私は支援にお金を払っているが、お金を持っていない人もいるかもしれないし、仕事を見つけるのはとても難しい。私の友人の多くは仕事をしたくてもしていない。

私はどうやって施設を廃止するのかを知らず、また政府が実際に廃止するのかどうかわからない。政治家は全くそのことを話さない。彼らは本当に気にしていないと思う。もしこのことを話す人がいるなら、私はその人に投票する。しかしすべての人が投票できるわけではない。多くの人が法的能力を制限され、投票すらできない。

私が施設から出られたのは、当時働いていたソーシャルワーカーに助けられたからである。彼は、他のスタッフとはまったく違っていた。他のスタッフは、私に対してとても厳しく、とても中立的であった。彼はもうそこで働いていない。私は、施設のスタッフが入所している人を助けることがとても重要だと思う。そうでないと、施設にいる必要がないことすらわからず、自分で外に出ることはできないので。

(*施設の活動について*）例えば、グループでの外出は、嫌なら参加しなくてもよかったのだが、その時は他にすることがなかったのも事実である。

施設は、人を中に入れておきたいのであって、外に出そうとはしないのもだと思う。施設のスタッフ自身がこれを変えたいと思わなければならない。でも、Bさん（*リチャードの退所を手助けしたソーシャルワーカー*）のような人は、施設では見かけない。

**注：この投稿で示された見解はリチャード氏のものであり、リチャード氏の意見募集への参加を可能にした団体の意見を必ずしも反映するものではない。**

（翻訳：佐藤久夫、岡本明）

1. イタリックはガイドラインについてリチャードと話し合ったソーシャルワーカーのコメントである。 [↑](#footnote-ref-1)